

資本主義と貨幣について語り続けるといふこと

——岩井克人『資本主義の中で生きるといふこと』の主要論点

塚 本 恭 章

本稿の目的は、二〇二三年に文化勲章を受章された岩井克人先生の新刊『資本主義の中で生きるといふこと』（筑摩書房、二〇二四年九月二〇日初版）をめぐって、私自身がとりわけ大きな知的関心をもった本書の重要論点を提起することです。本書刊行を機とした岩井克人先生との対談インタビューの草稿としてもとはは作成されたものですが、本稿をふまえたより本格的な論考を次回に執筆する計画であり、そのための準備作業ともなることでしょう（岩井先生との対談インタビューは、二〇二四年一月七日に神田神保町の「読書人」の社屋にて実施されました。¹本書への私の書評を、すでに『情況』と「週刊読書人」の二つの媒体において発表しています）。

*

本書『資本主義の中で生きるといふこと』の刊行後、私は、秋学期二年次生の演習系科目「基礎演習」で、

本書を輪説テキストとして活用しました。それには、以下に述べるような複数の明確な理由が存在します。

もちろん一つめは、本書が岩井先生の「新刊」であることです。日本で本書をテキストにした「最初の授業」となったかもしれません。だが、それ以上に大きなもう一つの理由は、本書が「岩井克人」の「思考」の全体を鳥瞰できる作品ということです。二つの意味合いがあります。

一つは「岩井克人」であるという点です。岩井先生の研究テーマは多岐におよび、不均衡動学の理論、資本主義・貨幣論、会社・法人論、会社統治論、信任関係論、「言語・法・貨幣論」など、経済学を出発点にしながらもそれをはるかに越境しています。一人の経済学者による、経済学、法学、倫理学などを有機的に結び付けた「統一的な研究」の全体像が、本書から学べることになるのです。経済学史をふりかえってみても、アダム・スミス、マルクス、シュンペーター、ヴィクセル、ハイエクそしてケインズなど偉大な経済学者は、みな「資本主義」について語ってきました。岩井先生の経済理論研究こそは、まさにこうした偉人たちの「学問史」を独自に引き継ぎ、語り直すものにほかなりません。

さらにいえば、「資本主義」について語り続けるためには、「貨幣」、「法人」、「信任関係」、そして「言語・法・貨幣」という社会的媒介（社会的実体）が「人間」社会にもたらす「自由」についても語らないといけません。本書『資本主義の中で生きるということ』は、こうした大きなテーマについて、半世紀におよんで語り続けてきた岩井先生の深い「思考」の集大成ともいえるエッセイ集です。それらについて描き出される「世界」こそは、二〇一五年の学問的自伝『経済学の宇宙』（日本経済新聞出版社、「補遺」を含む文庫版刊行は二〇二一年）における「宇宙」という言葉がけっして誇張ではないほどの豊かな拡がりをもっています。したがって、本書を経済学部生にむけて有効活用しない手はありません。

もう一つは、岩井克人の「思考」であるという点です。岩井先生の「思考」は、既存の経済理論を根源的か

つ批判的に捉え直しながら、つねに独自の見解を打ち出すものです。その「思考」をつうじてわれわれが実感できるのは、「学問」というものの凄さ・面白さであり、それを学ぶ楽しさなのです。『資本主義の中で生きるということ』がもつ「真価」に学生諸君とともに少しでも近づけることを願い、今後の数年間は本書を演習系科目のテキストとしていきたいと思っています（講義系科目のテキストには、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年をこの五年間活用し続けています）。私は本書の「真価」という表現を使いましたが、岩井先生の学問的思考は、われわれが想像している以上に、じつはもっともっと「深い」ところで有機的に結び付いているのではないか。そうみなしたとき、岩井克人の深い学問的思考を「追体験」できることこそが、本書の「真価」に辿り着くためのきわめて有効な方法なのです。

*

以下、私自身が学問的にひととき興味深いと考える六つの主要論点を提起し、本書を読み解くための〈導きの糸〉としてみたいと思います。

（一）岩井エッセイ集の「集大成」

新刊『資本主義の中で生きるということ』は、岩井先生のこれまでの数多くの「研究」成果にもとづくエッセイ集です。日本語での最初の著書である一九八五年の『ヴェニス①の商人の資本論』、そして二〇〇〇年の『二十一世紀の資本主義論』に続く、エッセイ集の集大成となる三冊目の作品となります。

いうまでもなくここでの「集大成」という場合、岩井先生の研究テーマについての論考やエッセイが網羅されているというだけでなく、それらが岩井先生自身によって拡充され、深められた「思考」そのものが凝縮さ

れているということがより重要だと思います。資本主義論、貨幣論はいうまでもなく、会社・法人論、信頼関係論、「言語・法・貨幣」論などについて、岩井先生の現時点での思考の到達点を知ることができるからです。

ところで、すでに述べておいたように、本書と同じく筑摩書房から刊行されている『ヴェニスの人々の資本論』と『二十一世紀の資本主義論』は、いずれも長編論考を巻頭におき、その後、各エッセイを配置する構成になっています。本書『資本主義の中で生きるということ』は、それとは異なっています。「ファンレター」と題する短いエッセイが巻頭にあります。その理由については本書「あとがき」でも触れておられますが、上記をふくめて、あらためて本書刊行の狙いや意図、既刊書とのつながりや岩井先生における本書の位置づけなどについて、われわれはどのように理解することができでしょうか。

（二）『経済学の宇宙』あとがきの「頂点」と「没落」

本書「Ⅵ 時代の中で自分を振り返る」に所収されている二〇一五年の『経済学の宇宙』の「あとがき」。二頁の短い文章ですが、時代史と自分史をめぐる岩井先生の「思考」のほとんどすべてが集約されている印象です。したがってそこには、この「あとがき」を本書に所収するなにか必然的な理由があったのではないでしょう。本書全体、いや、岩井先生の学問研究全体をいわば象徴しているのが、この「あとがき」にもある「頂点」と「没落」という岩井先生に独自の表現にほかなりません。

ポール・サムエルソンやロバート・ソローといったMIT大学院時代の岩井先生にとっての「先生」は、当代随一の経済学者であり、主流派経済学の頂点に立ち続けた人物でもあります。主流派経済学の枠内で早々と論文を一流誌に掲載し、三年かからず博士号を取得した岩井先生は、主流派経済学の最先端の地である米国

で学者人生の「頂点」を迎えることになるのです。しかしながら岩井先生は、経済成長理論の研究を続けるよう励まし、当該分野のフロンティアで活躍している経済学者を紹介しようと進言されたソローの申し出を断り、ケインズ経済学（不均衡動学）の研究にテーマを大きく変えていくのです。主流派経済学の研究から「主流派経済学批判」に転じていく学者人生は、こうして「没落」が始まっていったとみずから回顧されています（岩井克人他『経済学の宇宙』二〇一五年）。

岩井先生がいわれる「頂点」と「没落」、ここにはいったいどんな「含み」が込められているのでしょうか。このことは、岩井「資本主義・貨幣論」の意義や位置づけをより内在的に理解することと関連しているはずであり、主流派経済学の頂点にいたサムエルソンやソローに対する評価の高低にも関わってくることでしょう。さらにいえば、「頂点」から「没落」していく過程において、岩井先生の学問的姿勢に大きな影響をおよぼすことになった宇沢弘文先生の「宇沢問題」をみずからの問題として意識し続けることになったことも、けっして見逃すことはできません。

（三）語り続けてきた「資本主義」と「貨幣」

あえて端的に述べるならば、岩井先生は、なぜこれほどまでに長く「資本主義」と「貨幣」について語り続けることができた（できる）のでしょうか（もちろんこの点についての言及は本書の「あとがき」や、既刊書にもあります）。逆にいうならば、現時点で「資本主義」と「貨幣」についてどれだけ語り尽くすことができた、岩井先生は総括されているのでしょうか。私自身がとりわけ注目したいのは次の二点です。

一つは、岩井先生が、「資本主義」と「貨幣」についての体系的結論にすでに一九八〇年代には到達されて

いたと考えられることです。

前者については、「シュンペーター経済動学」を数学的に定式化するなかで、「資本主義の基本原理（利潤の差異原理）」に到達されている。「遅れてきたマルクス」はその内容を概説したエッセイです（『ヴェニスの人々の資本論』所収）。後者については、「貨幣の進化」論文をつうじて、「貨幣の自己循環論法」理論に到達されている。「貨幣の『靴ひも』理論」というエッセイはその一例です（『二十一世紀の資本主義論』所収）。重要なのは、岩井先生自身の「資本主義・貨幣」論は、時代こそ変わっても、まったく変わっていないということです。このことをどうみればよいか（われわれは依然、岩井先生の思考の真意に達していないのでしょうか）。

二つめは、上記の内容とほとんど同じですが、岩井先生が「現実が理論に追いついた」と時折、語っておられることです（たとえば『会社はこれからどうなるのか』平凡社ライブラリー、二〇〇九年、『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、二〇二〇年など）。いうまでもなくその「理論」とは、岩井先生の「資本主義論」であり、「貨幣論」のことです。「資本主義の基本原理（利潤の差異原理）」と「貨幣の自己循環論法」理論こそは、岩井先生によれば、じつは経済学の長い歴史のなかで、ずっと抑圧ないしは抹殺されてきたのです。本書「Ⅴ 時代を超えて考える」に所収されている長編論考「『貨幣論』の系譜」は、古代ギリシャのアリストテレスの「貨幣の逆説」とアダム・スミスの「貨幣の抑圧」という思考の対立構造をつうじて、経済学史と経済思想史の新たなあり方と存在意義を明確に打ち出す試みをなしています。

岩井先生がよく示唆されているように、「資本主義」と「貨幣」は本来に不可思議な存在です（「法人」も同様）。その「不可思議さ」に岩井先生が惹かれ続けていることは確かではありません。ただそれと同時に、主流派経済学が「資本主義」と「貨幣」という重要テーマについて「抑圧」し続けている状態を「批判」し続けることとの学問的必然性を強く感じ続けておられること、このことが、岩井先生自身がこれだけ長く「資本主義」と

「貨幣」について語り続けてこられた大きな理由の一端があるのではないか。このことは、「不均衡動学」の現代版構築への挑戦とも軌を一にしているはずだ。だからこそ、本書「あとがき」にあるように、「経済思想史」についての書物を書くことを将来的な目標に置かれていたのではないだろうか。

四) 岩井「経済思想史」の独自性と潜勢力

冒頭エッセイ「ファンレター」の送り主の米国女性Eさんは、一九八一年にエール大学で「異端の経済学」と題した岩井先生の「経済思想史」の講義を履修されていたようです。私はそのエッセイを読み、岩井先生が本書の「あとがき」において、「経済思想史」に関する著書を将来的に刊行するプランがあるとあらためて書かれていたのを読んだとき、Eさんの「ファンレター」の内容に共感すると同時に、次のように思ったことも正直に告白しておきます。「岩井先生の経済思想史の本が刊行されたら、私はもう一度、対談させていただく機会に恵まれるかもしれない」と。

岩井先生の「経済思想史」の潜勢力の所在も多岐におよんでいると私は思っています。「経済学」と「経済思想史」のふたつを有機的に結びつけるのが、岩井先生による独自の「経済学批判」という方法であることはいうまでもありません。主流派経済学においてはあくまで「実体」経済の補助手段であり派生物にすぎない「貨幣」こそが、じつは「実体」そのものを根源的に支えていること、マルクス経済学における「貨幣のパブル（恐慌）」ではなく「貨幣のパニック（ハイパーインフレ）」こそが、資本主義経済の真の危機であるなど、既存の経済学説の思考を「逆転」させていることなどは、「経済学批判」にもとづく岩井理論の大きな特徴です。

さらに岩井「経済思想史」の顕著な特徴をなしているのは、経済学を「社会科学」というよりは「人間科学」として捉え直し、「人間」がまさに「人間」として「生きる」ことを可能にする「言語・法・貨幣」という社会的媒介（社会的実体）についての思考を深めながら、それこそが岩井「経済思想史」の出発点であることです。その意味では、本書の題名『資本主義の中で生きるということ』は、すでに将来の岩井「経済思想史」のスケルトンを浮かび上がらせているともいえそうです。

岩井先生は「法人」論・「信任関係」論など経済学を越境し、アダム・スミス以降の理論体系が葬り去った「倫理」こそが、「法人」を中心的存在とする資本主義社会のまさに中核にあることをあらためて「発見」されました。一言でいえば、経済学というひとつの固有分野を超える研究を大きく推進させることで、一見「経済思想史」とは直接的に関係がないようにみえる論点がむしろ重要であることが鮮明になり、「経済思想史」そのものの理論的水準が引き上げられているということです。岩井「経済思想史」についてのこうした論点は、私自身の考察テーマかもしれません。

五）岩井「会社・法人論」はこれからどうなるのか

岩井「資本主義」論は、1）貨幣、2）法人、3）信任関係の「発見」から成り立っています。岩井先生に独自の「二階建て構造」論としての会社・法人論がもつ理論的射程は広く、それがフリードマンらの株主主権論と自由放任主義への根源的批判をなしていることは当然です。さらに、日本における社会、日本の会社を「多元的な普遍性」のなかの「一つの普遍」とみなす岩井先生の「思考」を明確に表明するものでもあります。

ここでは次の二点がきわめて重要な論点となるはずです。一つは、「会社・法人論」研究から岩井先生が新

たに推進されている「信任関係論」についてです。より根源的な人間関係こそは「信任関係」であり、「契約関係」はそこから派生したものであると岩井先生は表明されている。ここにも主流派経済学批判と同時に、主流派経済学の基本思考の「逆転」が読み取れます。産業資本主義からポスト産業資本主義の時代への転換においては、「おカネで買えないヒトの頭脳の創造性しか、差異を生み出してくれない」（岩井「二〇二四」、二五四頁）。二つめは、この文章後に付された脚注4「付記」についてです。岩井先生が現在、最も多くの時間を割いて思考されている「大問題」とは、まさに生成AIやLLM（大規模言語モデル）などの爆発的発達という近年の現象そのものにほかなりません。そのことは「機械が人間以上の知的な創造性を持つことになる日がもう間近に迫っているかもしれないことを告げている」のであり、「それは、ヒトとモノとの関係が再び逆転してしまう日でもあるはずである」（岩井「二〇二四」、二五九頁）。こうした「逆転」のインパクトは、「資本主義」や「会社」のあり方そのものにどのような影響をおよぼしうるのでしょうか。

六）岩井先生にとっての「先生」と「友人」

本書の最後「Ⅷ 亡き人を悼む」の全体を通読すると、長年の友人だった石川経夫君、「先生」であり「師」であった宇沢弘文先生、小宮隆太郎先生など、岩井先生への知的影響の大きさがよく分かります。集大成としての岩井エッセイ集の締め括りとしてもっともふさわしいのではないでしょうか。五一歳で亡くなられた、長きにおよぶ盟友の石川経夫君への「弔辞」には、「君の与えてくれたものを君には返せない。だから、僕たちはそれを世の中に返すしかないのです」（岩井「二〇二四」、三四八頁）とあります。心に沁みる一文だと思います。先に触れた米国女性Eさんが岩井先生に送った「ファンレター」の内容に通じるものがあるはずです。

一〇年前の宇沢弘文先生「追悼文」（二〇一四年九月二八日）を読み直され、岩井先生は率直に今どのような感慨をもたれるのでしょうか。『経済学の宇宙』にある「宇沢問題」は「宇沢・岩井問題」として、これからの残りの二十一世紀、さらには二十二世紀においても引き継がれていくことでしょうか。

ここでいわれる「宇沢問題」ないし「宇沢・岩井問題」とは、自由放任主義に理論的基礎を与える主流派の新古典派経済学への批判および新古典派経済学からの脱却という「冷徹な頭脳」と、正義感にもとづく自由放任主義批判という「温かい心」とのあいだのギャップのことであり、このギャップのあいだで宇沢先生は長らく葛藤されてきたのです。その大いなる「葛藤」こそが、岩井先生の研究姿勢に色濃く深い影響をおよぼし続けてきたことは、上記の二）ですでに言及したとおりです。本書に所収されている、岩井先生の宇沢弘文先生「追悼文」の最後に記載されている、次のような文章を書き記しておきます。柔和にみえる晩年の宇沢先生の本当の素顔は、想像のなかでじつは厳しい顔つきであり、「その顔は、私の世代、いやもつともつと若い世代の経済学者に対し、『冷徹な頭脳』と『温かい心』とを結びつける仕事は残されたままであることを告げているのです」（岩井「二〇二四」、三五八頁）。

【追記】

岩井克人先生の新刊『資本主義の中で生きるということ』をめぐって実現した、岩井先生との対談・インタビュー。これについて、最後に言及しておきたい。本稿に記したように、対談は二〇二四年一月七日に実施された。私はかつて、二〇〇四年冬学期の岩井先生の東大「経済学史」講義を拝聴する機会を得たが、それからじつに二〇年、岩井先生に直接お目にかかることがなかった。岩井先生のご著書の書評を一般紙に執筆し、『経済学の宇宙』や『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』をもとに長文論考を学術専門誌に書き、ICU国際

基督教大学での岩井先生の最終講義（Z o o mにて実施）を拝聴しそのレポートを発表し、これまで本当に数多くのメールをつうじて学問的やり取りをさせていただいてきたにもかかわらず、だ。もしかしたら、自分には岩井先生とお会いできる機会が今後も訪れないのではないかと思ったこともあったかもしれない。二〇年ぶりの再会にして、新刊をめぐる初めての対談。本当にきわめて幸せな時間であった。

岩井先生がみずからの学者人生をゆっくりと振り返りながら紡がれていったひとつひとつの肉声としての「言葉」の重みを感じながら、私は耳を傾け、そしてインタビューを続けた。ポール・サメルソンやロバート・ソローらをMIT大学院で指導教授としながら、主流派経済学のまさに中心地アメリカで「頂点」を迎えることになった若き日の岩井克人。MIT大学院留学時代は一九六九年から七二年。それゆえ、その当時の岩井克人氏の話は、対談当時五〇歳の私（一九七四年生）がこの世に生を受ける以前のことである。岩井先生の「生身」の姿とそこから発せられる「肉声」をつうじて、まさに広大なる「経済学の世界」の拡がりをはっきり垣間見えた。学問的自伝『経済学の宇宙』で活写されている「活



岩井克人先生（左）と著者
（株）読書人の社屋にて（2024年11月7日）

字」をつうじた「経済学の世界」とは大きく異なる印象を抱いたのだ。人間同士が同じ時間に同じ場所で、こうして「対面」して「対談」できることがどれだけ貴重で得難いことか、心底実感することができたのではないかと思っている。

主流派経済学の「頂点」から、その後、主流派経済学批判へと転じ「没落」していった自分自身は「当然ながら世界の岩井ではない」といわれるが、「経済学の世界」は主流派経済学のそれに限定されうるものではなくてない。岩井先生の「批判」的思考こそは「独自」の理論彫琢に遺憾なく発揮され続けており、主流派経済学が今なおその理論体系において抑圧し続けている「資本主義」や「貨幣」についての根源的探究は、本書『資本主義の中で生きるということ』における、最も重要な学問的営為のひとつをなしている。対談を終えた翌十一月八日、岩井先生にお送りしたメールの一部で、私は以下のような感慨を書き綴っていた。「二〇二四年一月七日に岩井先生にお会いできたこと、新たなスタートの日にしたく思います。本音をいえば、岩井先生はやっぱりとてもカッコいいな、そう二時間ずっと思っておりました。みずからに課された問題を見いだし、納得いくまで解くこと。その学問的営みをこれほどまでの高い水準で持続されてこられたこと、さらにいえば、細部にいたるまで岩井先生は本当に正確に記憶されており、こういったことすべてに大きな感銘をうけました」。

本書『資本主義の中で生きるということ』を演習系科目の輪読文献として活用している私は、ぜひ履修学生へのメッセージをいただけないかとお尋ねした。岩井先生はしばし思考し、丁寧に返答してくださった。岩井先生の内容的にきわめて深いメッセージを学生諸君が心から理解できるその日がくるまで、私は本書と一緒にそのメッセージを語り続けていきたい。そして最後にこう記して本稿を締めたい。二〇年ぶりに岩井先生にお会いできたこと、それは二〇年という長い年月をかけて私自身が岩井理論や岩井「経済学史」を学び吸収する

ための期間だったのであり、私の岩井先生との再会をあえて時間が「待たせていてくれた」のである。

注

(1) 岩井克人先生との対談・インタビュは、「週刊読書人」二〇二四年二月六日、第三三六八号の一・二面に掲載されました。岩井先生の当該新刊『資本主義の中で生きること』への私の書評は三面に掲載されています。タイトルは「資本主義はこれからどうなるのか―貨幣・法人・信任関係の『発見』をつうじて」、です。なお当然のことながら、紙面に掲載されている私のインタビュの文言と本稿のそれがやや重複している箇所があることをあらかじめ指摘しておきたいと思っています。

(2) 岩井先生自身が経済学の偉大な先人たちの思考を「追体験」ないしは「追認」できたときこそが、「経済学って本当に面白い」と感じた瞬間であるようです。その内容の多くは二〇一五年刊行の学問的自伝『経済学の宇宙』で書かれておられますが、とりわけ以下の六点を指摘されています(岩井先生からの私信より)。1) 東大法学部時代に根岸隆先生の「近代経済学」講義を拝聴したとき、2) 『不均衡動学』を執筆している際、ヴィクセルの不均衡累積過程論をみずから定式化でき、貨幣賃金の硬直性がその不均衡累積過程を安定化させるというケインズによる洞察の意味を理解したとき、3) マルクス価値形態論の破綻を見いだしたとき、4) 「法人」という概念を発見したとき、5) その延長で「信任(関係)」という概念を発見したとき、6) 「貨幣論」から法論、言語論に向かう過程で、これまでの人類の思考の多くが、「社会的媒介」について思考できなかったこと(あるいはそれについての思考を拒否したこと)が、誤りを生んでしまったことに気が付いたとき、です。

【参考文献】

岩井克人「二〇一五」『経済学の宇宙』(聞き手 前田裕之) 日本経済新聞出版社。
 岩井克人「二〇二四」『資本主義の中で生きること』 筑摩書房。